

特別支援教育（知的障害）

中山美代・高阪英徳・城 一樹・梶山雅司
藤井朋子・檜和田祐介・小田原 舞・西 勉

【中学校卒業時のめざす生徒像】

- 自分の役割を自ら果たそうとする生徒

【授業仮説】

- 自己肯定感を高める授業を継続して行うことで、自分の力を発揮し、それぞれの生活の場で自ら責任をもって役割を果たそうとする姿につながっていくであろう。

【研究の経過】

本学級では、これまでの研究で、自己肯定感を自尊感情をはぐくむ際に肯定的に働く感情ととらえ、自尊感情を育む授業づくりを行うことで、自己肯定感が高まっていくのではないかという仮説を立てた。自尊感情には基本的自尊感情と社会的自尊感情があるとし、日々の授業のなかで、教科等の特性を生かしながら繰り返し実践していった。この実践の過程において、児童生徒の自発的・意欲的な言動が多くみられるようになってきた。この成果に至るまでの授業実践を整理していくと、次の5つのポイントが自己肯定感を高めるために有効な視点であることが明らかになった。

- (1) 児童生徒が意欲・興味・関心のある教材（題材）を設定すること。
- (2) うまくいかないことをやり遂げる現実度を上げること。
- (3) 活動量・活動の主導権を児童生徒の実態を考慮して適切に配置すること。
- (4) ほめる・認める場面を設定すること。
- (5) 集団の力を活用すること。

また、課題として達成感を感じるためのゴールイメージの明確化、賞賛や応援などの言葉かけの精選、自己肯定感に対する評価などがあげられた。

今年度はこれらの視点を取り入れた授業実践を積み重ね、継続して授業モデルの開発を行うとともに、児童生徒の様子を体系的に整理し、評価の方法を検討していく。

【基本的な考え方】

近年、学校教育においては、複雑化、多様化していく社会の中で、自ら様々な課題の解決を図り、主体的に周囲と関わっていくための力を育てていくことが求められるようになっている。そうした力の基礎となっているのが、周囲の他者との関係の中で、自分が価値ある存在であることや自分の存在を大切に思う気持ちである自己肯定感である。学校教育の中で、児童生徒の自己肯定感を高めていくことが求められている。

特別支援教育においても、障害のある児童生徒の自己肯定感を高めることにつながっていく指導の手だての検討が求められる。

特別支援学級で学ぶ児童生徒の状況を見ると、これまで経験のないことや困難なことに出会った時、不安や自信のなさから、課題に対して消極的な行動になることが見られている。その結果、自分が何をどこまでできる力を持っているのか、課題に取り組む中でどう解決を図ればよいのか自信が持てないまま過ごし、持っている力を十分発揮する経験を積まないまま学校生活を送っていることも見られる。

小学校から中学校の9年間は、様々な問題を乗り越えて生きていくために必要な知識や技能等を基礎的な段階から定着・活用する段階へと継続して積み重ねていく時期であり、自己肯定感についても継続

的に形成していく重要な期間だと考える。

そこで、特別支援学級で学ぶなかで、9年間を通して様々な力を積み上げていくことにより、自己肯定感を高め、生活や学習の場で自分の役割を自ら果たそうとする児童生徒を育てていきたいと考えた。

児童生徒のこれまで経験してきた学校生活におけるそれぞれの実態や発達段階などを考慮し、活動や行動上の目標を一人一人に具体的に提示したり、自分で目標を立てさせたりすることを通して、目標達成による成功体験や達成感を得る機会を多く経験できるようにしていきたい。また、個人の経験だけでなく、集団の中で周囲との関わりを通じた経験が積み上がっていき学びのつながりを実現することで自己肯定感を高めることをめざしたい。

本研究においては、自己肯定感を「自分の評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」と定義する¹⁾。そして、自己肯定感を支える二つの側面として、「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」を考えている。「基本的自尊感情」は、他者の比較や優劣といったものからではなく絶対的根源的な思いとして、自分はこのままでよいと思える感情である。また、「社会的自尊感情」は他者との比較や優劣に影響される感情で、プラスの評価を受けたり勝負に勝ったりすることで高まっていくものである²⁾。

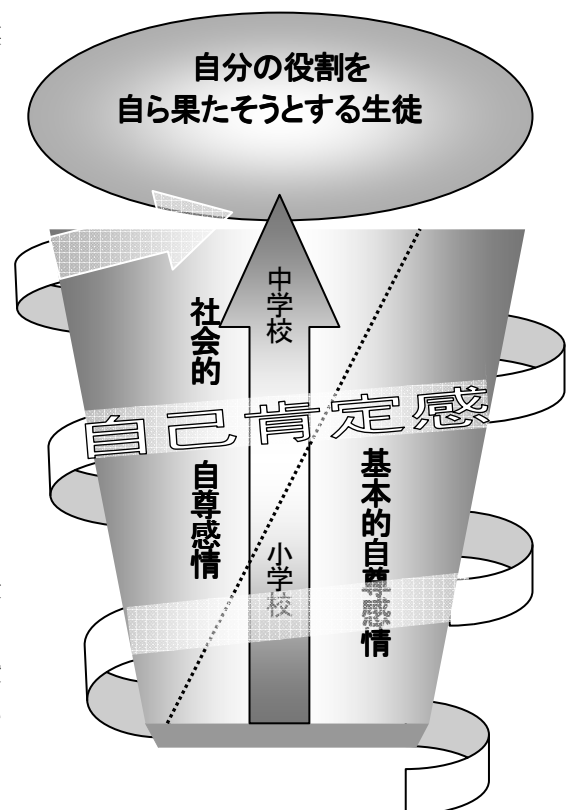
研究を進めるにあたっては、小学校と中学校を通じ、児童生徒の実態に合わせて、この「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」をバランスよく指導していくことをめざしていくこととする。

小学校段階は、主に「基本的自尊感情」を高めていくために、基本的な学習をしたり生活スキルを習得したりしていく時期であり、目標と手段が明確な活動や身近なものから社会的なものへと発展していくことをねらった活動を行っていく。低学年では興味や関心を中心にした様々な活動を経験して活動自体に対する意欲を育てるようにし、中学年ではこれまでの学習をもとに内容を発展させたり自分でやってみようとする意欲を育てたりする指導や支援をしていく。さらに、高学年ではこれまでの学習をいかにしながら自分で考え、自ら取り組もうとする力やまわりを巻き込んで一緒に学習する力を育てることを授業作りにおいて大切にしていきたい。

中学校段階では、自分には良いところがあるという思いをもとに、役に立つ存在であるという思いが持てる経験を積むことで、主に「社会的自尊感情」を高めていきながら、具体的な生活の場で臨機応変に対応していく力を育てていく。例えば、これまで、キャリア教育の一環として大学の協力を得て大学での清掃等の実習を展開してきたが、更に社会的な自尊感情を高める手立てを工夫していきたい。

このように、小学校と中学校の9年間を通して、「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」を育む授業作りを進めることで自己肯定感を高め、目指す生徒像の具現化を図っていきたい。その際、「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」のバランスを小学校の段階、中学校段階でそのウェイトを変えながら進めていくものとする。

また、授業場面だけでなく学校生活場面全般での児童生徒の言動の変容を捉え、その記録を検討することや指導者間の情報交換を行うことで、生活に広がっていることを確かめながら仮説の検証を行う。



【研究仮説の構造図】

【本年度の研究計画】

1 目的

これまでの成果と課題をふまえ、小学校および中学校の児童生徒の実態に応じた授業づくりを研究仮説の構造図をもとに進めていきながら、めざす生徒像の具現化を図る。

2 方法

つぎの点に留意しながら授業づくりをおこなっていく。

(1) 児童生徒の実態に合わせて成果となる5つのポイントを意識した授業づくり

成果としてあげられた5つのポイントは平素の授業造りにおいても重要であるが、小学校、中学校の児童生徒の実態から特に重点的に取り組むべき点をしぼり授業づくりにいかしていく。

(2) ゴールイメージを明らかにするとともに、どこで評価するのかを児童生徒へもわかりやすくした授業づくり

個々の児童生徒に対してどのような力をつけていくのかを明確にしながら、その時間におけるゴールイメージを児童生徒がもつことができるようにするとともに、それが評価につながるようにする。

(3) 自己肯定感をどう客観的に見取っていくか、その方法の模索、検討。

授業における取り組みをおこなっていくなかで、実態としての評価や成果としての評価をどのように行っていくかを検討する。児童生徒の実態に応じて自己評価や他者評価などもとりいれていく。

これらの授業づくりに関する取り組みは大学とも連携しながら、理論研究および実際の指導場面の方策などを検討していく。

【参考文献】

- 1) 平成21年度 東京都教職員研修センター紀要等10号 「自尊感情や自己肯定感に関する研究 第2年次」
- 2) 近藤卓 『自尊感情と共有体験の心理学 理論・測定・実践』 金子書房 2010.
- 3) 明橋大二『子育てハッピーアドバイス ほめ方・叱り方1・2』 1万年堂出版 2010.2011.
- 4) 広島大学『学部・附属学校共同研究紀要2011 第40号』広島大学学部・附属共同研究機構 2011.